

「自由に描く」

—チゼックの美術教育とシーレ芸術の共通性について—

金田佳子

エゴン・シーレは1918年に、エーリッヒ・レーデラー（以後「レーデラー」と記す）にシーレが絵画専門学校を設立する計画を立てている手紙を書いている。彼は、ハンガリーの重要なパトロンであるアウグスト・レーデラーの息子で、1912年の12月にクリスマス休暇と新年にハンガリーのジュールでシーレと出会っている。シーレによる彼の数枚の肖像画が残されている。特筆すべきことに、レーデラーは、シーレから絵画の教授を受けていたことがある。

シーレとグスタフ・クリムト研究者兼画廊主であった故クリスティアン・M・ネベハイが指摘しているように、シーレが晩年に絵画専門学校を設立する計画を立てていたことは今まであまり知られてこなかった。それに加えて、レーデラーは、シーレだけではなく、美術教育のパイオニアであるフランツ・チゼックの生徒でもあったことがわかった。シーレ、チゼック共に、ウイーンアカデミー出身で、20世紀初頭のウイーンで活躍したこと、クリムトを始めとするウイーン分離派関係者達と交流したことなど共通点が多いにもかかわらず、現在まで二人の関係性についてほぼ取り上げてこられなかった。

日本でのチゼック研究の第一人者兼芸術教育学研究者である石崎和宏氏によると、チゼックは、子どもが実際に見ているのではなく、心の中にある印象、経験したものや、想像したものを描いていること、それにより、子どもは自分自身を表現していることを指摘している。さらに1925年にチゼックは、美術工芸学校の専門コースの内容についてハンス・カストナーと『自由に描く（Das freie Zeichnen）』を共著しているが、そこで自然を対象として自由に描くこと、また教師の手本を写し取らせることや、上手な絵を描かせることが目的ではないことを記述している。石崎氏によると、チゼックの独自性は、模写の代わりに、自然形態の研究—自然を通した分析的観察表現に基礎を置きながら、他方で自己の心を無意識に絵の中に告白させ、それを表現の一つとして、生徒に自由を強調させて制作させたことにあるという。それは、興味深いことにシーレ作品にも数多く見られることである。

シーレだけではなく、チゼックの美術教育が当時の芸術家達に与えた影響について、まだ深く追及されていない現状がある。20世紀初頭のウイーンの美術についての理解を深めることも含め、今後もこの研究を進めていくことは、大変意義があると思われる。